

「主は、わたしたちを造られた」

(旧約聖書 詩編 100 編 3 節より・・・6月の聖句)

私の同級生(男性)の結婚式に参列した時の話です。「結婚式」と言っても、私の同級生も牧師なものですから、結婚式は本物の教会の礼拝堂で行い、その披露宴は、同教会の大ホールで行われました。ちなみに、その同級生の花嫁の父親も牧師であり、その会場となった教会は、花嫁の父親が担務する教会であり、結婚式の司式をしたのも、花嫁の父親でした。・・・だから多分、ものすごく費用は浮いたと思います。これも、牧師家庭の特権(?)でしょうか。私の知る限り、他にも自分の娘の結婚式を執り行った牧師はいました。しかし、一体、どんな気持ちで花嫁と、その花婿の真正面に立って言葉を語るのでしょうか・・・。今は、まだ想像できませんね。

さて、その同級生の結婚式は祝福の内に執り行われ、披露宴も馴染み深い教会の大ホールで和気あいあいと盛り上がり、いい塩梅のところでお開きとなりました。その後、ホールに残されたケータリングの料理を大皿に寄せて、これまた冷蔵庫に残された祝酒を持ち出して、親しい友人・家族だけの、ささやかな2次会が催されました。「なんとなく始まった」という、予定されていない2次会です。この2次会の席で、結婚式の司式者であり、花嫁の父であり、会場教会の牧師である、その人は、お酒のせいなのか、疲労のためなのか、少々うな垂れた様子で冷えたピザをかじりつつ、一言「今日、オレは娘を神様に返したんや」と呟きました。失礼なことに、私は、この父親牧師が結婚式で語ったメッセージを何一つ覚えていないのですが、全てを終えた後にポツリとこぼした「娘を神様に返したんや」という一言を、今でも印象深く覚えています。

言うまでもなく、この父親牧師は、花婿のことを「神様」と言ったわけではありません。これはキリスト教独特の理解かも知れませんが、人一人の尊厳を重んじるキリスト教では、自分の子どもについても「神様から今だけ任せられている大切な預かり物」という捉え方をします。神様から命を与えられて、自分のところに生まれて来てくれた子どもを、しばらくの間、独り立ちするまで「お預かりしている」。そして、子どもは、いつの日か、親の手を離れて、自分の希望と選択に基づいて、自らの人生を歩み出します。その日というのは、親の目から見れば「子どもが旅立つ日」であり、キリスト教的に見れば「お預かりした大切な存在をお返しする日」でもあるわけです。「今日、オレは娘を神様に返したんや」という呟きは、大切な存在を「お預かり完了」した父親牧師として、自負と喜びと、寂しさと心残り、そんな色々な感情が入り混じった、奥深い一言だったのだと思います。まあ、本人に確認はしていませんが、そんな気がします。

「主は、わたしたちを造られた」という6月の聖句は、親と子どもの関係性を整える上でも有用なのかも知れませんが、親は子どもに愛情を注ぎますが、でも、それは決して子どもを「自分の所有」とするからではありません。私たち一人一人、子どもたち一人一人、みんな「神様から命を頂いた尊厳ある一個人」です。お互いの愛情が伴う固い絆や、支え合い・励まし合いの中で力強く連帯することはあっても、子どもが親に束縛されたり、支配されたりということは、どうしても避けたいところです。時に、子どもを強く抱え込み、思い通りにしたくなることもあるかも知れませんが、そんな時に「いやいや、私たちに命を下さったのは神様。この子も神様からお預かりしている大切な存在」と思うと、少しだけ力を抜くことができるのではないかな、と。ちょっと可笑しい考え方ですけどね。でも、そう思います。

敦賀教会幼稚園は、神様に命を与えられた大切な子ども達を、深い愛情をもって大切に守り育てるご家庭から、さらにお預け頂いて保育を続けています。ここには、本当に大切な大切な子ども達が集まっています。そのことを肝に銘じ、一つ一つの準備、一言一言の声掛け、一回一回の所作を丁寧に整えて参ります。子ども達が安心して過ごし「ありのまま」を大事にされ、愛情をたっぷり受け取って蓄えることのできる場所であるように。また、子ども達が、喜びを見つけ、自信をもって自分の人生を歩める人に成長できるように。寄り添える幼稚園でありたいと願っています。私たちのところに、大切なお子さんを預けて頂き、本当にありがとうございます。